昭和万葉集の指導に関する実践的研究

岡　田　貞　義

1　主題の設定まで

(1)　一般教育「文学」を単に概論的な内容とせず、講義と演習を並進させながらその理解を図るために、現代短歌を主体とした作品の読解・批評あるいは鑑賞を深め、感動のありかを探り、文学表現のもつリズム・余情更には緊迫性について触れていくことにした。

試みとしての講義・演習ではあるが、実践的研究の対象として現代短歌に焦点をしぼることとし、各面からの検討のうえ昭和万葉集を選んだ。

(2)　現代短歌の心を現代人の感覚で理解させるのは自明としても、さかのぼって関連のある万葉集・古今和歌集及び新古今和歌集などの研究をも進めることによって、歌の心を広げていきたいと考え、そのつど古典和歌を示すこととした。

(3)　文学のなかでも一般的にはなじみの薄い領域であると言えようが、昭和万葉集は多数の参加作品を包含し、日常身辺の生活詠がほとんどを占めているところから、簡潔な表現ににじむ人間性を把握し、力強い生き方を学習するには最適であると思う。

(4)　昭和万葉集の研究書をいまだ手にする機会がなく、わずかに島田修二・岡井　隆の両氏が「昭和万葉集秀歌㈠～㈢」の各巻末に述べている解説を参考にするほかはない。

昭和万葉集20巻を通読・研究することは講義時間として到底不可能であり、秀歌㈢に収められた「四季・自然」のうち90首をあらかじめ選歌し、私自身の学的研究としてどこまで迫り得るか、同時にこの素材を学習者にどの程度理解させ得るか、その結果をみようとして出発したのが本研究における主題設定の理由である。

(5)　昭和万葉集には、これが刊行された当時から関心をいだいて全巻を揃えたが、ひとつには拙作の「汲みて来し清水を口に移すときかすか笑みたり乳房病む妻は（巻十二）」が収載されているのを後に知ったことも、愛着を深くする契機となり、このたびの研究の動機となったと言える。

2　指導の過程

(1)　本学一年の家政科家政専攻・食物栄養専攻の全員、音楽科で選択した者にテキストとして「昭和万葉集秀歌㈢」を所持させた。

「昭和万葉集秀歌」は三部作であり、戦争と人間、相聞と挽歌、四季・自然と分冊になっているが、短歌入門の素材に適切な「四季・自然」をテキストに決め、週１回８～９首を

対象に指導計画を立てた。

(2) 指名読（輪番）で２回続けて読ませ、簡易な発問ののち、読解・鑑賞という単純な流れを繰り返したのも、現代短歌になれさせることに主眼を置いたからである。

集録されている作品群のなかの、いわゆる著名な作品については、他の著書などに例歌として引用され短評まで加えてあるため研究の手がかりもあるが、全作品について注釈した研究書は見当たらず、そのうえ私自身の理解程度の危うさ・もろさがそのまま自信のない講義となってしまうことへのおそれもあり、このテキストを指定したものの最初はかなり心理的負担を背負うはめにもなった。

ただ一つの方途として、これまで実作をかさねてきた自分自身の経験を土台に、一首ずつたんねんに解きほぐすことにしたが、時間の経過とともにしだいに自信がもてるようになった。

(3) 指名読の場合に留意した点は、リズムをくずさない読み方、つまり５・７・５・７・７をふまえた区切りを意識すること、句割れや句またがりのある歌はその意味を分断させないことなどである。

また、文語発想であることから歴史的かなづかい（旧かなづかい）を表記の原則にしており、「思はむ」は「オモワン」、「つたふ」は「ツトウ」と現代語音で読むのが通例であることなどを指摘し指導した。

(4) 簡易な発問の数例を次にあげることにする。

・春さむき梅の疎林をゆく鶴のたかくあゆみて枝をくぐらず……「梅の」「鶴の」の「の」の用法の違いを言え。

・春や来し春来るらし鶯の来鳴くあしたは心ときめく……「らし」は根拠のある推定と言われるが、どのような状態を、なにによって推定しているのか。

「あした」とはいつを指すのか。

・薄紙の中に蛍を光らせてたからのごとく子は持ちまはる……子どもが蛍をどんなに大切にしているかを表現した部分はどこか。

・夕立の雨うちふれり庭のへにひとつの蟬の啼きとはるこゑ……結句の止め方で気づくことはないか、またその効果を考えよ。

・月あかり水脈引く雲の波だちて夜空はすずし水のごと見ゆ……この歌の技巧について説明せよ。

・雪解の水たまりある歩道にてみづにかすかの鹿うごきをり……変化に敏感な目はなにをとらえているか。

(5) 上に掲げた例には難易とりまぜての発問内容があるが、体言止めを含む表現技巧にまで触れるのは入門時点では抵抗が大きく、これらの場合は、問題提示として注意を喚起する

程度にとどめようという意図があった。このほか設問として提示したものは次の十数首があり、学習者の思考・考察の時間を設けたのち、指導のヒントを与えることにした。

・蛇口よりしたたる水を飲みにくる蜂ありて暑き日照りのつづく……「暑き日照り」を具象化している表現を指摘せよ。

・秋彼岸すぎて今日ふるさむき雨直なる雨は芝生に沈む……的確な写実をしているのはどの部分か。

・いささかの希みを有ちて来む春を待つと障子も今日貼りかへぬ……「来む春」とはどういう意味か。

・トラックにたがひちがひに乗せられし牛が静かにわれを見下す……「静かにわれを見下す」牛をどんなに感じているのか。

・咲き満つる一樹の梅の白妙に匂ふばかりのよろこびありぬ……「匂ふばかりのよろこび」とはどんなよろこびか。

・ふるさとの盆も今夜はすみぬらむあはれ様々に人は過ぎにし……なにを「あはれ」と感じとっているのか。

・夕日かげかげりし原によごれたる山羊ひとつ居て風に吹かるる……この歌はどんな感じをただよわせているか。

・そよぎ立つ青葉が中の鳥の声なきやめばまた坂のぼりゆく……この一首から感じられる気分を言え。

・くれなゐのトマトを愛しむ夕の卓いのち鮮やかに生きてゆきたし……「いのち鮮やかに」生きてゆきたいという願いを象徴するものはなにか。

・わがこころなににさわぐと佇めばゆれたるごとし蓮の白花……「さわぐ」心はなにに投影されているのか。

・つみあげし漬菜の上に降る雨のたそがれ行けばみぞれとなりぬ……季節感のよく出ている表現を言え。

・澄みとほる朝の日射に冬畑の氷柱かがやき葱の秀は燃ゆ……「葱の秀」が燃えるとはどういう意味か。

・春昼の光くまなき磯の岩かもめ飛ぶときかげ早く過ぐ……「かもめ」の生き生きした姿をどう表現しているか。

・身の透けて心あらはになるごとき秋の日向の白きに遊ぶ……「秋の日向の白き」を順序を入れ替え普通の形にせよ。「秋の日向」は事実白いのか。

・山鳩は子を育つるか鳴き交す声低けれど谷にひびけり……いのちある者の強さはどこに示されているか。

・吾にはげしき夏くる兆し芍薬の花芯に細きくれなゐ見ゆる……「兆し」は何に見えてくる

のか。

・身に近く寄る蜻蛉ゐて翅おとのさだかに親し佶芝の上……鋭敏な感覚でとらえた部分はどこか。

(6) 現代短歌は、その一首の声調をこわさぬように繰り返し読むことを通じて感動を受けとめる、これに尽きると言えるが、やはり言語を媒体とする表現であれば、一語一語の理解、表現構成の分析、描写された情景の把握などの過程を重視しなくてはならない。

まして入門期における受講という立場の学習者に対しては、的確な口語訳を授与する必要性が大きいことを否定できない。

現代短歌は、古典和歌と異なり表現の語意的抵抗が少ないだけに、改めて現代語訳となるとかえって古典和歌より難渋を極める場合もしばしばある。

・春がすみいよよ濃くなる真昼間のなにも見えねば大和と思へ（前川佐美雄）

この一首は、奈良に生まれた作者が上京ののち、父が死去したため奈良に帰郷し詠んだ歌。島田修二氏は「春のかすみがこめてますます濃くなるものだから、周囲は何も見えなくなった。何も見えないからこそ、ああ大和にいるんだな、と思えばよい。」という意味だと述べている。

「なにも見えねば大和と思へ」の表現をどう理解するか、そこにこの歌に迫り得るか否かのポイントがある。そのため、初心者に理解させる適切な語訳はないものか、いやあえてていねいな口語訳を試みることは真意をそこなうおそれがある、とさまざまな意見と反論が交錯するのである。

一読して理解ができるラインにまで到達していない、それどころかスタート地点から誘導しなければならない学習者への配慮をどう具体的な現代語訳で対応すべきなのか。

「春がすみが立ちこめてますます濃くなっていく真昼間、なにものも見えなくなったが、自分のいるここはふるさと大和の国にちがいない、いやまぎれもなく大和の国だ。」と作者が作者自身に納得させ、愛着をより深めさせている、それが「大和と思へ」という強い調子になったと説明するのは無理なのであろうか。

・牡丹花に車ひびかふ春まひる風塵のなかにわれも思はむ（北原白秋）

作者が一日年老いた両親を慰めるため牡丹園に遊んだ時の作品。宮柊二氏は「園の咲いている牡丹に、門外を行く車のとどろきが絶えずひびいている春の日中である。ああ、それにしても近代の騒音を花に受けながら、充ち足り咲きたりている牡丹花のなんという美しさ不思議さ、力――春ぼこりの中に立ちながらそのよってくるところをつくづくと私も思うのだ。」と意釈しているが、そのあと「われも思はむ」の助詞「も」は並列をあらわすから、われよりほかにあるものは、牡丹花が展開している詩の世界である、その詩の世界に感動し「われも」と言った、と述べており、深い読みとりであるだけになんら補説の

要なく、歌人宮柊二の直入力に感嘆させられる。

この一首は「われも思はむ」という観念的内容をどう理解するかにポイントがあると言える。「抽象的な表現ではあるが、強くゆさぶられている作者の心が感得できるのではないか。」と私の鑑賞ノートは結んでいる。

(7) 指名読、現代語訳と進み、次は鑑賞の段階となる。

この段階では古語、文法、修辞などの主として言語面と、感覚、イメージ、真実などをさぐる心情面との両面から迫っていくこととし、昭和万葉集以外の女人短歌や古典和歌なども広く引用して短歌の拡充を図っていった。

・春や来し春来るらし鶯の来鳴くあしたは心ときめく

ここでは「うちなびく春来たるらし山のまの遠き木ぬれの咲きゆく見れば（万葉集八・1422）」や「この川にもみぢ葉流る奥山の雪消の水ぞ今まさるらし（古今和歌集・冬・320）」を引用し、助動詞「らし」を理解させるための資料とした。

・白菊はただつつましき花ながら月のてらせばたけたかくみゆ

「ながら」の接続関係を明確にさせるために、古今和歌集・春下・75の歌「桜散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする」の一首も参考にし、逆接の接続機能を学習させた。

・兄島を榜ぎ回み行けばちちのみの父島見えつ朝明の海に

・あらがねの土に春雨ふりしづみ色あたらしき片栗の花

この二首における「ちちのみの」「あらがねの」の枕詞がどのように生かされているか、語調のうえからと語意との関わりの両面で理解させていった。

・流れくる吹雪に真向くしまらくは鶏もまなこ閉ぢて佇ちぬつ

ふぶきに立ち向かう鶏の姿、「しまらくは」「まなこ閉ぢて」耐えているさまを愛情こめて描いている。「藻の花のゆらぐとみればいつの日も創もつ魚の遅れて泳ぐ（女人歌抄）」の一首に注がれた目に通うものがありはしないか、懸命に生きようとするものの強さに打たれるのである、とこの歌の短評をまとめた。

・山すそにわきつぐいづみ村びとは石をたたみて清くたもてり

この一首は、村びとの飾り気のなさが清らかな「いづみ」に呼応しているが、「ものいはぬやさしさにみちて降る雪は知りたき駅の名も埋めたる（女人歌抄）」にみる「やさしさ」にも似た細やかな人情を感じる。拙作の「もの言はぬゆゑにいとほし前肢を挙げすがりくる犬の目の澄む」も、「いづみ」「降る雪」と同様の「もの言はぬ」ものから受ける感動に支えられているのである。

・山鳩は子を育つるか鳴き交す声低けれど谷にひびけり

・巣立ちしていまだ目たたぬせきれいも有るか無きかの尾を振るあはれ

この二首は改めて現代語訳するまでもない内容だが、ここに歌われている「いのち」の「あはれ」を感じとりたい。「巣立ち」してやがて「子を育て」る一生のあゆみは人間世界と同じ、ならば「桜ばないのち一ぱい咲くからに生命をかけてわが眺めたり」の作者岡本かの子の生き方に共鳴できるのではないか。

・トラックにたがひちがひに乗せられし牛が静かにわれを見下す

・かへり行く先も檻にて芸終へし猛獣どもはゆるく歩めり

みずからのゆくえを知ってか知らでか、「静かに」「ゆるく」動きを見せる生き物を淡淡と写実し、深い思いを潜めているが、読者はこの歌から、心に切り込んでくる痛みを感じることはないだろうか。

・身の透けて心あらはになるごとき秋の日向の白きに遊ぶ

・くらがりに潮の香はこぶ風ありて風の彼方の遠き潮騒

「色」をどのようにとらえるか、それは感性や感覚の鋭敏さいかんにかかってくるが、事実そのままの「色」ではなくて、透明であるはずの秋の日を「白き」色とみることは誤りなのかどうか。ここにその感覚的表現の芸術的真であると認められるかどうかの問題が生じてくる。あくまでも事実を超えた真実として訴える「白き」色でなければならない。短歌における虚実を理解させるのに最適の素材と考える。

「潮騒」は「香」と「音」で作者の心にひびいてくる。「くらがり」では視覚の機能する余地はないが、この鋭さはからだ全体が感覚的に作用し生まれてくる、そして、「遠き潮騒」の体言止めによって無限にイメージが広がるのである。「咲きあふれ散りあふれつつとどまらぬ一木さびしきわれの山茶花(女人歌抄)」「磯の香の洗ひて落ちぬ髪もてば朝さはやかに海にある思慕(々)」の「われの山茶花」「海にある思慕」からも余情はあふれ出る。さびしい思いに包まれるわれ、淡くやさしい心のひだの波打つわたし、をちりばめていくロマンを味わわせたい。

3　指導の結果

(1)　単調な講義・演習の連続ではあったが、四月以来の一応の結果をまとめてみたいと考え、一方では、九月が「文学」閉講という教育課程のしめくくり段階であることからも、これまで選択し吟味してきた短歌のみでなく、昭和万葉集秀歌[3]に収載されている作品すべてのなかから１首を選び、感想文形式で原稿用紙１枚程度の内容にし提出させることとした。１週間の余裕ではあったが全員の提出があり、指導者にとって、果たしてどこまで現代短歌に親近感をいだかせ得たかの評価を受ける機会となるだけに、不安と期待がこもごも寄せてくる思いであった。

・日常生活に密着している歌

・生活感情のにじみ出ている歌

・明るく心をかき立てる歌

・人間愛に満ちている歌

・生きる意欲をそそる歌

・静かに自己をかえりみる歌

・困難に立ち向かう強さを訴える歌

・さわやかな季節感のただよう歌

・確かな目を感じさせる歌

昭和万葉集秀歌(三)は、四季余情・日月残照・四季屏風・自然讃歌・四季有情・自然風景・四季残影・山水風月・春夏秋冬・自然風光に分類されているが、作品内容からみればさまざまな「心」が織り込まれており、このような分類には絶大な努力がそそがれたことと察する。

(2) 家政科・音楽科を通じて受講者が取り上げた作品は、理解しやすく切実感のある歌が多く、予測したとおりであった。

ここで感想を寄せた受講生数の多い順にあげてみたい。

・トラックにたがひちがひに乗せられし牛が静かにわれを見下す（馬場園枝）

・配給の餅かぞへて母のなき四たりの子らに多く割り当つ（吉野秀雄）

・くれなゐのトマトを愛しむ夕の卓いのち鮮やかに生きてゆきたし（横山日出時）

・春や来し春来るらし鶯の来鳴くあしたは心ときめく（西田幾多郎）

・蛇口よりしたたる水を飲みにくる蜂ありて暑き日照りのつづく（正田益嗣）

・薄紙の中に蛍を光らせてたからのごとく子は持ちまはる（小田清一）

・月あかり水脈引く雲の波だちて夜空はすずし水のごと見ゆ（北原白秋）

・真昼野の山田の畔を一人行けば青き麦萌ゆ生命ひた燃ゆ（大岡　信）

・巣立ちしていまだ日たたぬせきれいも有るか無きかの尾を振るあはれ（相馬御風）

・うつつにしものの思ひを遂ぐるごと春の彼岸に降れる白雪（斎藤茂吉）

・白菊はただつつましき花ながら月のてらせばたけたかくみゆ（橋田東声）

・ひっそりと白きとむらひ行きにける枯野に淡く雪降りそめつ（永井　隆）

・あたたかき春の日あびて丘に立ち国やぶれをしばし忘れつ（石井柏亭）

・そよぎ立つ青葉が中の鳥の声なきやめばまた坂のぼりゆく（土屋文明）

・忘れゐしものの心地に佇ちて聴く夕日の丘のかなかなの声（太田青丘）

・澄みとほる朝の日射に冬畑の氷柱かがやき葱の秀は燃ゆ（岩間正男）

・流れくる吹雪に真向くしまらくは鶏もまなこ閉ぢて佇ちゐつ（木俣　修）

・いささかの希みを有ちて来む春を待つと障子も今日貼りかへぬ（田村綾子）

・くらがりに潮の香はこぶ風ありて風の彼方の遠き潮騒（森岡　正）

・山鳩は子を育つるか鳴き交す声低けれど谷にひびけり（辻　克己）

・咲き満つる一樹の梅の白妙に匂ふばかりのよろこびありぬ（安田章生）

(3)　上記の作品は２名以上が選んだ歌のすべてである。いずれの作品に関しても、講義のなかで評価について先入意識を与えるような解説や鑑賞はしていないので、受講生自身の判断により、各作品の読解、生活の体験・感情を通じてすなおに選んだと言える。それだけに歌人の有名無名にかかわりなく、自由な選択眼で作品のみに視点を集中しており、指導してきた私自身にとっても、快い刺激となり反省の機会となった。

次に数編の感想を掲げることにする。

「トラックにたがひちがひに乗せられし牛が静かにわれを見下す」

・昔、子どものころ見たあの牛たちのかなしそうな姿が、この歌とともによみがえってくる。この牛たちは、自らの運命をさとってか、トラックから降りると、そこから動こうとしないという話を聞いたことがある。たがいちがいに乗っている牛たちの表情は静かではあるが、なにかを訴えているように作者には思えたにちがいない。

・ごく普通の情景を詠んでおり、言葉も平易だが、歌われている牛のさびしそうな目に感動した。すでに私は第三者ではなく、私自身が牛から見下ろされているように感じられてくるのだ。共感したと言ってもよい。

・私の母校は農業高校、牛が数頭飼われていた。暇な時など牛を見にいくと、言葉などかけなくても近寄ってくる。その牛も、ある日トラックに乗せられてどこかへ行った。牛の目は濡れているようだった。この歌からもあざやかに場面がうかんでくる。それほどに実感がこもっていると思う。

「配給の餅かぞへて母のなき四たりの子らに多く割り当つ」

・戦争中の事であるが、誰もみんな食べる物に困っているのに、母のいない四人の子どもに配給の餅を多く割り当てたという思いやりに心を打たれた。

・母親がいないさびしさのなかで正月を迎えても、悲しいだけの日を過ごす四人の子ども、正月餅を他より多くして、母のいない暗い思いを少しでも明るくしたい、という心のやさしさが伝わってくる。

「くれなゐのトマトを愛しむ夕の卓いのち鮮やかに生きてゆきたし」

・昭和万葉集秀歌をめくっていると、いつもこの歌が目に入ってくる。「トマト」という言葉からの連想が強烈だからである。最初、この歌から作者は病床にある人かなと思ったが、二度三度繰り返し読むうちに、毎日平凡に暮らしているので自分の命をたぎらすような生き方をしていきたい、と自分に言いきかせているのではないかと感じるようになった。

・季節のない温室育ちのトマトでさえ小さな命を感じる。太陽の恵みを直接受けた天然のト

マトを夕食のテーブルに置いたとき、みずみずしい生命の躍動に心さわがずにはおれない。「私もトマトも生きている」そう思うのだ。

「薄紙の中に蛍を光らせてたからのごとく子は持ちまはる」

・ほしくてしかたなかった蛍が、今自分の手の中にある。うれしくってたまらない気持ちをだれかに聞いてもらいたい。持ちまわっている子どもの気持ちが、自分の幼いころの思い出とかさなって思わず笑みももれてくることだ。

・得意満面の子どもの姿が率直に表されていて、ほのぼのとした思いに包まれる。きらきらと美しい蛍、その蛍は子どもにとっては光る宝なのだと思う。

「月あかり水脈引く雲の波立ちて夜空はすずし水のごと見ゆ」

・この歌を授業ではじめて聞いたとき、身近な情景をなんと美しく描写していることだと感動した。季節は夏の終わりで、旅先の山の旅館であろう、ひとり物思いにふけっていて、ふと見上げた空、月光に照らし出されたひとすじの雲が涼しそうに流れているという情景を詠んだものと思うが、この歌のかもすふんい気に心ひかれる。

・夏の夜空は美しい。月の光もあやしく、幻想をかき立てるように照らしている。その光が窓からさし込んでくると、自分のまわりに異次元の世界が出現するような不思議な気持ちになってしまう。

「いささかの希みを有ちて来む春を待つと障子も今日貼りかへぬ」

・作者はささやかな希望を、やがて来る春に託し、障子も貼りかえて待つという、楽しい気持ちを詠んでいる、そのあたたかさと幸福感にあやかることができそうな思いさえする。

・希望に満ちあふれている感じ、春の訪れが一足早く感じられる。

4　終わりに

「昭和万葉集秀歌」の脚注を研究の手がかりに作品の全容に触れ、現代短歌に詠まれている人生に感動を求めようと努力し、可能なかぎりの客観的評釈を試みてきたが、あるいは主観的理解にとどまっていたかもしれず、今後引き続き研さんをかさねていきたい。

演習方式を導入したものの、講義主流とならざるをえない現状から方法論において山積する課題を、実践を通して究明することも重要だと考えている。

一般教育「文学」について、内容を概観するよりも領域を限定して指導することに主軸を置いて展開してきたが、受講生の真しな取り組みに激励される日々によって、充実した２単位を終えることができた。

発展的な学習として短歌実作も考えられたが、なによりも多数の作品に触れることを優先させるべきだと思い、もし心ある者の積極的活動の申し出があれば実作への手ほどきもしてみたい、という範囲にとどまっているところである。

更に、文語発想特有の簡潔性、緊迫性を生かした文章表現にまで進むならば、書くこと、作ることへの興味・関心の深化に伴い、その素地となる現代短歌についての理解・鑑賞力が高まり、感受性豊かな人生がひらけてゆくに違いないと思う。

〔参考文献〕

昭和万葉集　全20巻

昭和万葉集秀歌㈠戦争と人間　島田修二編

〃　㈡相聞と挽歌　岡井　隆編

〃　㈢四季・自然　上田三四二編

現代短歌入門　島田修二著

短歌に見る人生　宮　柊二著

女人歌抄　尾崎左永子著